

新規採用されて赴任した学校で、先輩の先生が、「すごい」と自分自身が感動しながら授業をされている姿を拝見した。その時、私は、授業で大切なのは教師自身が笑顔で楽しくワクワクしながらすることであると教わった。教師の理科好きは生徒に伝染すると感じた瞬間だった。それ以来、「理科は感動だ！」を合い言葉としている。

授業の工夫はもちろん必要であるが、理科室経営も必要であると考え、生徒が来るだけで楽しいミニ博物館のような知的好奇心を活性化させる理科室作りに努めてきた。つまり、他の教室とは空気が違う理科室である。また、生徒が使いやすい理科室となるよう実験道具の整理整頓をしたり、4年前にはLANケーブルを素人工事で理科室まで引き込み、理科室でインターネットを使った授業展開ができるようにしたりした。支援を必要とする生徒に対応するために、映像や動画を使った具体的で分かりやすい授業となるよう実物提示装置や電子黒板も整備した。

私は、IEA（国際教育到達度評価学会）とほぼ同じ設問を使用して、定期的に理科好きの調査を行っている。昨年の11月に実施した調査では、中学3年生の「理科が好き」という生徒の割合は90%近くとなった。これは、日本平均55%を大きく上回り、国際平均79%やシンガポールの86%をも上回った。しかし、男女別に見ると男子の「理科好き」97%に対して女子の「理科好き」80%、男子の「理科の授業が楽しい」100%に対して女子の「理科の授業が楽しい」80%であった。この結果から、女子の理科嫌いの生徒を意識した授業をすることがクラス全体の理科好きを増やすことにつながると考え、日々工夫している。また、科学を使う仕事をしたい生徒の割合は、40%前後と少なく、職業と科学との関連性を考えていない生徒や理解していない生徒が多い。そのため、キャリア教育との関連も考えた授業展開になるよう工夫している。

しかし、感動のある授業を行うためには、充実した理科室が必要である。教育にはお金がかかる。そこで、本校では、経済産業省が実施しているエネルギー教育実践校として昨年までの3年間助成金として、160万円近くの支援を受けた。また、ソニー子ども科学教育プログラムに応募して、特別賞を受賞した。おかげで、これまでに赴任した学校では一番充実した理科室となっている。

また、青少年の科学の祭典などを通じた人との出会いで、生徒はもちろん私自身がたくさんのお話を学ばせていただいている。昨年は愛媛大学教育学部准教授渡邊重義先生をお迎えして「種子散布の不思議」について1年生を対象に出前授業を実施することができた。また、高知工科大学の大学生には、手作りの自転車発電装置を持参してもらい、それを使って協力しながらエネルギーについての授業をすることができた。また、教育センターとも連携できつつある。このように科学に関するいろんな人とのつながりから生徒に多様な体験ができるチャンスを与えることができるようになってきた。今年度は、独立行政法人科学技術振興機構(JST)によるサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業(SPP)講座型学習活動プランAに選考された。そのため、夏季休業中に希望の生徒が愛媛大学へ行き大学の先生方から講義を受けることができる。11月には、文部科学省による女子中高生の理系進路選択支援事業により広島工業大学と連携して女子生徒だけを対象と

した実験講座を土曜日に開催する予定である。今後は、地域の方や地元の高校とも連携した活動を進めたいと考えている。

授業をしていると、なかなか思うようにいかないこともある。失敗もある。しかし、選択国語の時間に書いてくれた女子生徒の詩を読むと、やる気が沸いてくる。「学校の先生は、一般的に頭が良ければいいのだと思っていたけど、最近思い直している。理科の三好先生は、授業の実験のために道具を買ってきたり、手作りしたりすばらしいと思う。本当に理科が好きで、そして生徒を大事に考えないとできない職業だと思う。先生のおかげで理科の授業がとても楽しいです。」

今後も「理科は感動だ！」をモットーに、生徒とともに成長していきたい。さて、今年の夏も昨年に引き続き、青石ブロック星座観測会を地域の小学校にも呼びかけて実施するぞ。